

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：37118

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00859

研究課題名（和文）日本人英語教師のクラスルーム・インタラクティブ・コンピテンス育成の為の談話研究

研究課題名（英文）Studies on classroom discourse to enhance the classroom interactional competence of Japanese teachers of English

研究代表者

細川 博文（HOSOKAWA, Hirofumi）

福岡女学院大学・国際キャリア学部・教授

研究者番号：10249625

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究で次の点が明らかとなった。（1）教師は学習者の談話構築力を育成するために、談話の文脈を重視し、発言をパラフレーズしている、（2）インタラクションが生まれる授業では、教師が事実関係だけでなく生徒に推論を求める発話を繰り返している、（3）教師のCIC育成には、教室談話操作能力のさらなる研究および研修が必要である。しかし、さらに重要なことは、現状を招いた根源的問題は、教師が学習者の「声」に十分耳を傾けてこなかったからではないか、この状況を改善することが今後の英語教育の方向性を決定する重要な問題ではないのか、ということが見えてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の英語教育は大きく変わろうとしている。文科省は、小・中・高・大を通して英語力の持続的育成を図ろうとしている。その具体的方策として「授業は英語で」行うことを求めている（学習指導要領）。本研究は、日本人英語学習者のコミュニケーション力不足の原因が、学習者の「言語知識」だけでなく、「談話構築能力」及びその能力を育成する教師の「談話操作能力」に問題があるとして包括的に英語教育を捉え直した。さらに、英語力が十分に伸びない背景に、学習者の「声」を拾い上げる授業が様々な理由で行われていない可能性を指摘した。学習者の「声」は学習への主体的な取り組みと関係しており、今後さらなる研究の必要性を示した。

研究成果の概要（英文）：The following points have been found from this study: (1) in order to enhance students' discourse construction ability, teachers emphasize the contexts of discourse and paraphrase their conversations, (2) in interactive classrooms, teachers repeatedly ask information-check as well as inference questions, (3) to enhance teachers' classroom interactional competence, further research on discourse control ability and teacher-training sessions will be needed. More significant, however, is to acknowledge that little attention has been paid to students' 'voice'. Therefore, changing this situation would play a crucial role in establishing the direction of future English education in Japan.

研究分野：応用言語学

キーワード：インタラクション 教室談話 英語指導法 教員養成 教師のCIC育成 授業の振り返り

1. 研究開始当初の背景

日本の英語教育は今大きく変わろうとしている。文科省の進める「高大接続」プログラムに示されるごとく、初等・中等及び高等教育の接続を通して英語力の持続的育成を図ろうとしている。そのための具体的方策として「授業は英語で」（高等学校学習指導要領）行うことや大学入試における「4技能」試験の導入が提唱された。

このように制度的にはコミュニケーション能力育成に向けて大きく舵が切られようとしているが、実際には教室内でインタラクティブな学習が生まれていないという深刻な問題がある。その主たる原因は多くの教師が英語知識の定着に授業の重点を置いているからである。その一方で、教師の9割が実践的指導法に関する情報交換や育成講習を望んでいることを示す調査結果もある（Hosokawa, 2016）。コミュニケーション能力育成が思うように普及しない原因として教師の英語力不足が指摘されるが、実際にはコミュニケーション能力育成に関する実践知の不足の方が深刻である。今後指導法改善にむけた抜本的対策が施されなければ、コミュニケーション能力育成を目指す教育方針は破綻する可能さえある。

このような背景から、日本人英語学習者のコミュニケーション力不足の原因は、単に学習者の「言語知識」に問題があるのではなく、学習者の「談話構築能力」(discourse construction ability)及びその能力を育成する教師の「談話操作能力」に問題があるのではないかと仮定して包括的に英語教育を捉え直す研究が求められる。

2. 研究の目的

これまでの言語習得研究の中心は英語圏での英語学習(ESL)が主たる対象となり、教室外で英語に触れる機会が少ない日本の学習環境(EFL)に必ずしも応用できるものではなかった。これに対し、近年教室内の言語習得に焦点を当てた研究が海外でも注目され始め、教室談話と教師の役割の重要性に光が当てられるようになった(Walsh, 2011; Loewen, 2015など)。しかし、長年文法訳読式教授法が中心であった日本の英語教育において、言語使用を指導の中心に置くインタラクティブな授業に切り替えることは容易ではない。

こうした状況を変えるものとして近年「内容」学習と「言語」学習の両者に焦点を当てたCLIL(内容言語統合型学習)やEMI(英語媒介指導)といった指導法が提唱され、日本でも導入されようとしている。ただ、こうした

教授法が教育現場に浸透する為には、教室内での談話研究が不可欠であり、教師のどのような「語りかけ」がインタラクティブを引き起こすのか、また、インタラクティブを通して学習者の英語表現がどう変化するのかに関する研究が必要である。「授業は英語で」(高等学校学習指導要領)という方針を成功させるためには、教室でのインタラクティブな状況を自由に変更できるコンピテンスが教師に求められる。しかし、そのような実践的教室談話研究はまだ不十分であると思われる。

研究課題の学術的「問い」

課題(1):教師は学習者の「談話構築能力」をどのように育成しているか

課題(2):インタラクティブな学習が生まれる教室談話にどのような「特徴・類型」があるか

課題(3):教室談話を誘導する教師の「クラスルーム・インタラクティブ・コンピテンス」の育成はいかに可能か

上記3点の研究成果は教室での学習が中心である日本の英語教育に重要な示唆を与えると考える。

3. 研究の方法

平成30年度:「教室談話に関する教師の意識調査(質問紙)及び分析」

学習者の談話構築能力育成に関する意識調査、教室談話データ収集(授業観察)、インタラクティブ・コンピテンス研究を推進するWalsh教授(University of Hong Kong)と研究に関する情報交換を行う。

令和元年度:「データ収集(授業観察・ビデオ録画)及び談話分析」

インタラクティブな学習を引き出す教室談話の分析、及びインタラクティブな学習に発展する教室談話の特徴に関する分析を行う。また、EMI(English Medium Instruction)教育を進めるMacaro教授(University of Oxford)と研究データの共有及び意見交換を行う。

注:Macaro教授との研究協議はパンデミックのため中止した。

令和2年度:「過去2年間で収集したデータを分析・報告書作成」

インタラクティブな学習を引き出す教室談話の研究、及び教師のインタラクティブ・コンピテンス育成に向けた指導法研究を行う。

注：パンデミックのため教室談話データ収集が不十分であったため2年間延長して令和4年度まで研究を継続した。

4. 研究成果

英語を使って英語の授業を行うためには、教室内のインタラクションが重要である。単に教師が英語を使うということではなく、学習者との間でコミュニケーションが成り立ち、英語を使うことを通して習得を促すことが求められている。しかし、教室内的な効果的なインタラクションを維持するのは容易でない。このような事情から、教室談話 (classroom discourse) の研究が注目され、Walsh (2006, 2011, 2013) はCICの重要性について研究を続けている。また、教師が自分の授業を振り返る活動を通して、授業の質を上げようとする試みがMann & Walsh (2017) によって研究されているところである。

本研究は「日本人英語教師のクラスルーム・インタラクティブ・コンピテンス育成の為の談話研究」であり、CIC (Classroom Interactional Competence) に焦点をあてて、教室談話の質を上げ、英語の習得を促す方法について研究を行った。パンデミックの影響で教室現場でデータを十分に収集することができず、また、研究を2年間延長して令和4年度まで実施した。その間パンデミックは終息することなく十分な教室談話データを収集することができなかったが、得られたデータの分析を通して確認されたことを前半でまとめ、後半では当初の研究射程を超えるが、今回の研究を通して分かったさらに根源的な問題について述べる。

研究課題とその成果

研究課題に対する成果は以下の通りである。

課題(1)：教師は学習者の「談話構築能力」をどのように育成しているか

①コンテキストを大切にす

授業の入り方から、教科書の進め方、教室での話題へと今何が話題になっているのか、頻繁に生徒に確認のことばをかけながら授業を進めている。何かについていきなり話し始めたり、クラスの一部の生徒だけが理解できる談話が続いたりすることがないように注意している。

②生徒の発言をパラフレーズする

英語の発問に対して生徒が答えられなくても、少し間をおいて考える時間を与えている。また、生徒の発言をパラフレーズ(言い替え)してクラス全員が分かるように繰り返すことで生徒の英語力を手助けしている。

課題(2)：インタラクションが生まれる教室談話にどのような「特徴・類型」があるか

①クラスの雰囲気

インタラクションが活発になされているクラスは一様に教室が和やかな雰囲気で包まれている。生徒が明るく、緊張した雰囲気がない。思ったことを自由に話し、教師が生徒の言葉によく耳を傾けている。つまり、コミュニケーションの「場」の構築に十分に配慮している。

②英語による発問の工夫

教科書を使って授業を進めるためには、生徒が語彙や文法を理解していることが基本である。教師は、英語・日本語を臨機応変に使用して語彙の意味確認をしばしば行っている。また、テキストの内容確認においては、事実関係を確認する発問に生徒の推論を求める発問をうまく絡めながら投げかけ、生徒自身の経験や意見をうまく拾っている。

課題(3)：教室談話を誘導する教師の「クラスルーム・インタラクティブ・コンピテンス」の育成はいかに可能か

①振り返り (reflective practice)

学校によって異なるが、お互いに授業を公開して他の教師から意見を求める教師もいる。お互いに学び合う態度及び情報を共有し合う雰囲気が普通に存在する学校には、教師も生徒も生き生きして活気がある。

②教員研修のさらなる充実

英語で英語を教えるという指導法が必ずしも浸透しているわけではない。アンケート調査から分かるように、インタラクティブな指導法を専門的に学んだ経験がない教師が多い。今後、教室談話の構築方法や生徒の発言を引き出すための研修や支援が必要である。

以上が本研究の簡単なまとめである。インタラクションを重視する教師は様々な点を工夫しながら授業を構築していることが分かった。

ただ、指導法については教師によってかなりばらつきがあるのも事実で、今後さらに教師の CIC 育成が課題である。

根源的な問題

以下は少し別の角度から英語教育を考えたい。英語教育をマクロに観察すると、ここ数十年間学習者の英語力に大きな進展が起こっていない。ミクロ的には教室での英語指導に様々な工夫が見られが、マクロ的には教師の指導を超えたところで大きな問題が存在しているように感じる。教室での授業を概観すると、次のトルストイの言葉が参考になる。

All happy families resemble one another, each unhappy family is unhappy in its own way. (*Anna Karenina*)

「幸福な家庭はすべて互いに似かよったものであり、不幸な家庭はどれもその不幸のおもむきが異なっているものである」(新潮文庫)

「家庭」ということばを「授業」に替えてみるとよくわかる。今回の研究を通して「何が教室でのインタラクションを妨げているのかよく分からない」ということも感じた。つまり、「うまくいっている授業は互いに似ていて、うまくいっていない授業はそれぞれに問題がある」ということである。端的に言えば、コミュニケーション型の指導ができる教師育成が不十分であるといえるだろう。教師の英語力、生徒の反応を促すインタラクションの方法、英語の使用を通して徐々に正確さを高める指導力、など数え上げれば切りがないが、現場の教師を支援し、大切に教師を育てる時間と財政支援が足りないとも言える。したがって、コミュニケーション型の授業もあれば、そうでない授業もあり、授業の質が一定しない問題がある。このように様々な問題が山積しているのは事実だが、もっと根源的な問題が存在するのではないか。

それは、生徒の「声」が奪われてしまっているのではないかと、ということである。この状態で教室でのコミュニケーションを成り立たせようとしても無理があるように思える。日本の教育は英語に限らず、知識の伝達が中心であり、授業中の質疑応答や討論、またその延長としてのエッセイの作成が限られている。討論をするにしても、そこには形と答えが準備されており、全く答えのない問いを考える時間的な余裕がない。答えのない問いというのは必ずしも解決策のない社会問題を指しているのではない。生徒の身の回りのありふれた出来事や好みの問題でも構わない。とにかく自分で考えて話をまとめ、ことばで表現す

るという日常経験が不足している。これは全教科に共通することで、英語力の育成を英語教科のみで解決しようとするに所詮無理があるように思える。これまでの英語教育は英語教科内で完結していたのではなかろうか。たしかに、国語力と関連させて述べることもあったが、その議論とは少し違うように思える。

生徒には自分の「声」がある。つまり「言いたいこと」がある。その「声」が教室内で尊重されて、それを基に知識の獲得と理解が深まる環境があれば、英語の習得はテクニカルな問題に帰されるのではないかと思われる。たとえば、インタラクションを通して文法に気づかせる (focus-on-form)、生徒の発言内容を確認する (negotiation, recast など)、タスクを与えてグループで取り組む (task-based language teaching)、専門知識も同時に教えてさらなる英語力を育成する (CLIL: 内容言語統合型学習) などこれまでに多くの研究と提案がなされてきた。しかし、日本において英語力育成がこれほど不成功に終わっているのは、単に英語が日常使われない環境にあるだけでなく、鶴見 (2010) が指摘したように英語教育において「コミュニケーション」と「英語」の順序が逆転して、英語の知識のみに終始し、生徒の「声」を拾い上げることに失敗してきたからのように思える。換言すれば、生徒の「声」を取り戻すことができなければ、現状を変えることはできないということである。

本研究を通して、授業のやり方そのものを再度見直し、生徒の「声」に耳を傾けているか、生徒の「声」は失われていないか、などについて検討するとともに、失われた「声」を取り戻すにはどのような方法があるのかという点について新たな研究が必要であると痛感した。社会が内向きになり、不登校や引きこもる若者が増えているのは、自分の「声」が届かないことへの失望や SNS に見られる匿名の過剰攻撃による「声」の喪失ではないだろうか。「声」があるところに「コミュニケーション」がある。それを母語と異なることばで表現しようとするときに「外国語学習」がある、と考えれば、これからの英語教育も大きく変わるかも知れない。

参考文献

- Loewen, S. (2015). *Introduction to instructed second language acquisition*. Routledge.
- Mann, S. & Walsh, S. (2017). *Reflective practice in English language teaching: Research-based principles and practices*. Routledge.

- Walsh, S. (2006). *Investigating classroom discourse*. Routledge.
- Walsh, S. (2011). *Exploring classroom discourse: Language in action*. Routledge.
- Walsh, S. (2013). *Classroom discourse and teacher development*. Edinburgh University Press.
- 鶴見俊輔 (2010)『教育再定義への試み』岩波書店
- 細川博文 (2016). Secondary school teachers' attitude towards communicative language teaching: A report from a KAKEN questionnaire survey, 福岡女学院大学紀要 国際キャリア学部編, 査読無, 2巻, 2016, 1-18,

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 2 件)

- ①細川博文, Learning-based production or production-based learning: A classroom dilemma, 外国語教育メディア学会 (LET) 九州・沖縄支部紀要 23 号, 査読有, 2023, 15-27
ISSN 2433-7579 (online)
- ② 細川博文, Developing classroom interactional competence of pre-service teachers at university through online lesson-plan studies and reflective practice, 福岡女学院大学紀要: 国際キャリア学部編, 査読無, 7 巻, 2021, 89-109
<http://hdl.handle.net/11470/863>

〔学会発表〕 (計 6 件)

- ①細川博文, Learning-based production or production-based learning? A classroom dilemma, 外国語教育メディア学会 (LET) 第 49 回九州・沖縄支部研究大会, Online, 2022
- ② 細川博文, Reflective practice and classroom discourse development: A pre-service teacher training study in Japan, 大学英語教育学会 (JACET) 第 60 回国際大会, Online, 2021
- ③ 細川博文, Innovations in university English education: Connecting secondary and tertiary education, 大学英語教育学会 (JACET) 第 32 回九州・沖縄支部研究大会, Online, 2021
- ④ 細川博文, Japanese English teachers' classroom interactional competence: A

report from a questionnaire survey, 大学英語教育学会 (JACET) 第 31 回九州・沖縄支部研究大会, 東海大学熊本キャンパス, 2019

⑤ 細川博文, Classroom Interactional Competence の育成: 4 技能統合型授業の足場作りへ, 外国語教育メディア学会 (LET) 第 47 回九州・沖縄支部研究大会 (招待講演), 福岡大学, 2018

⑥ 細川博文, Investigating Classroom Interactional Competence of Japanese English Teachers: The role of space for discourse comprehension, 大学英語教育学会 (JACET) 第 57 回国際大会, 東北学院大学, 2018

〔図書〕 (計 1 件)

①細川博文, (株) 大商印刷, 『日本人英語教師のクラスルーム・インタラクティブ・コンピテンス育成の為の談話研究』, 2023, 70

6. 研究組織

研究代表者

細川 博文 (HOSOKAWA, Hirofumi)
福岡女学院大学・国際キャリア学部・教授
研究者番号: 10249625

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 細川博文	4. 巻 23
2. 論文標題 Learning-based production or production-based learning: A classroom dilemma	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 外国語教育メディア学会（LET）九州・沖縄支部紀要	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細川博文	4. 巻 Vol. 7
2. 論文標題 Developing Classroom Interactional Competence of Pre-service Teachers at University through Online Lesson-Plan Studies and Reflective Practice	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡女学院大学紀要 国際キャリア学部編	6. 最初と最後の頁 89-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 細川博文
2. 発表標題 Learning-based production or production-based learning? A classroom dilemma
3. 学会等名 外国語教育メディア学会（LET）第49回九州・沖縄支部研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 細川博文
2. 発表標題 Reflective Practice and Classroom Discourse Development: A pre-service teacher training study in Japan
3. 学会等名 大学英語教育学会（JACET）第60回国際大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 細川博文
2. 発表標題 Innovations in University English Education: Connecting secondary and tertiary education
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET) 第32回九州・沖縄支部研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 細川博文
2. 発表標題 Japanese English Teachers' Classroom Interactional Competence: A Report from a Questionnaire Survey
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET) 九州・沖縄支部 第31回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 細川博文
2. 発表標題 Classroom Interactional Competenceの育成：4技能統合型授業の足場作りへ
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 (LET) 第47回九州・沖縄支部研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 細川博文
2. 発表標題 Investigating Classroom Interactional Competence of Japanese English Teachers: The Role of Space for Discourse Comprehension
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET) 第57回国際大会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 細川博文	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大商印刷	5. 総ページ数 70
3. 書名 日本人英語教師のクラスルーム・インタラクティブ・コンピテンス育成の為の談話研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------